

龍南會雜誌第五拾七號

論 說

社會の研究につきて

石橋愛太郎

是我一家言にして只我志をいふものなり社會の事は哲學の範圍にあるものなれば之を述ぶるは須らく哲學的なるべしと雖
吾は抑之を打破せんの論者にして大言不慚耳者を當今哲學者の通弊なりと思へりされば實際的に社會の研究をなすもの最緊
要なるを知る故に拙文晦澁諸君が笑を買ふも恨まず死骨を求めて遂に千里の馬を得たる例により吾は死骨を賣りて人をして
千里の逸足を買ふとを得せしめば國家の爲大に喜ぶ所なり

緒 論

遠く太古の茫漠たる時に溯りて地球の状態を見よ、森林鬱として繁り野獸縱横に奔走せる間に、原人
は三々五々として各所に點在し一の定所なかりしなり。然るに人間社會の種子は此間に蒔かれ、饒原
沃野の土に培はれて萌芽次第に發生をなし、君主專制の世に替を發きたりしも、嫉妬は天の免かれざ
る所か將亦天意の存するあるか戰國擾亂の雨となり、又教權一統の世となりて花を開きける、されど
あはれ革命の風は之を散らさんとし、漸く殘んの花は實を結ばんとして法律一統の世とはなりける。
然るに又もや陰雲深くとゞして風にやならん雨にやならんと思はれしに議論紛擾の世と過て、遂に
は道理一統の果實となり了らんとするに至りぬ。

此の如く一榮一衰經過し來る所の因果の間歴として見るべきものは社會の大道たる優勝劣敗是な

り、而して其優勝劣敗は自然淘汰に委せずして、後世に至り人爲淘汰盛んに行はれ、生存競争の爲めに此優勝劣敗の極端を用ひて、弱肉強食暴戾飽くことなき獸態を呈し來りつ、此爲には罪惡をなすも顧みざるに至り人心の道光日に消磨し終りて、只に利にのみ熱注するに至りぬ。即ちカアマイルが『信仰によつて生存す』といへる人も宗教道德の範圍を脱出し了りて、法律の網を潜らんことにのみ力め、老子の所謂『人法地、地法天、天法道、道法自然』の可きに自然を破りて無倫不道をなし、悖德破廉耻を以て意とせず或は却て利器とするに至れり、曰く賄賂曰く弄花曰く賣友曰く何々の結托などとして、富貴なるものゝ裏面の汚醜拜金宗の販扈貧寒窟の慘狀等到底枚舉に暇あらざるなり。是の如き社會の大勢は表裏の間雲壤の差を生じ、表に菩薩を裝ひ裏に百鬼夜行をなすもの、滔々として回す可からざるものあるに至れり、是心あるもの皆輦感する所なりと雖、吾人既に皆此濁流中に沈淪せんとして、俗にいふ朱に交はれば赤くなるの譬にもれず、濁流中にありては遂に清水を知る可からざるの如きなり。

是を以て見れば、吾人の如き高等教育を受け、後來社會の中流以上に立ち牛耳をどらんとする壯年者は、豈悠々として之を對岸の火視し等閑に附するを得可けんや。必ずや吾人の如き壯年者は益大の社會的眼光を開きて、滔々たる此狂瀾を既倒に回す可き大覺悟を發せざる可らざるなり。されども是言ふに易く行ふに難きもの、必竟空論に近きが如しと雖、翻て思へば、之を等閑に附し進む所に従はしめば社會の大勢果して何處にか定まらん、思ふて茲に至り寒心肌粟を生ぜざるものは人に非るなり。

舊社會とは何ぞや、社會とは人類の聚合にして、部落或は國民てふ状態にあるものなりと社會學にい

へり。然らば人は社會を成立する分子にして、社會の本は人にあることを知る可し、蓋し一部の書籍は文字を記せる數十乃至數百の紙片の聚合にして、紙片なくんば一の書籍なく、書籍をえるには一枚一枚に讀了せざる可らざる如く、社會を知らんとするには其成分子たる人を知り悉す可きは勿論なり。故に衣食其他人間生活に必要な物件を分配供給する社會の條件は、一に人間の之を分配供給する状態にあるなり。然るに當今の社會に見よ、徒らに電信蒸氣機械等の人目を眩惑す可き裝飾を以て文明なりとし開化なりとし、遂にカアライルをして『縊縷の文明』と叫ばしむるに至れり。孰んぞ知らん、美麗なる人形の内部には反古紙を以て張られ、鍍金遂に其物の地金を蔽ふ能はざるを。而も俗界は盛裝せる醜人の美を喜びて其真相を見ざるなり。かゝる故に當今力を盡して表面的社會の改良進善を計るも、内部人心の改良進善に指を染むるもの宛も曉天の星の如く少なり。是秋毫を視て興薪を見ず、本を忘れて末を知るものなり。古言に本亂れて末治まるものはあらじと。社會に心を傾くるもの必ず人間を研究せざる可らず、社會の研究といふも畢竟人間の研究の一部なり。

かく論じ來れば社會の研究の必要なるを見又之を研究するは人にあることを知る可し。其詳説に至つては一朝一夕に盡す能はざるものにして、余が生を投ずるも九牛の一毛だも價せずと雖、只少しく繰回していはんとす。其意蓋し叙辭に述べし外本論を以て、吾人同輩の社會に對する情の厚薄有無を試験するリトマスペーパーたらしめんとするにありて、果して青くならんか赤くならんか今之を見んと欲するなり。只深く嘆ず余は餘りに感情に奔り沈思冷想筆を下す能はず、狂暴疎野文を成さるを。然れども識者の見て以て領き、遂に吳下の舊阿蒙たるや否やを俟つ人を俟たんものなり。

吾は此文に對して如何にするも惡口を忌まず唾棄するを怒らず、只冷淡なるを見れば衷心自ら國家の

爲に悲まんのみ、されどカアライルの次の言あり強ちに失望せざるなり。

I prophesy that the world will once more become sincere; a believing world with many Heroic in it, a heroic world!

附言男子國の爲に身を立てんとするものは屑々たる小人の事を學び、衣食の爲めに力を捨てゝ可ならんや、必ず社會の事業をなし快哉を呼ばざる可らず、その職分の何たるを問はず、一部二部三部皆各其職に在て其分を盡し社會的眼光を加ふれば可なり。然せんには必ず社會學の一端を窺ひ、その進化の原因結果よりして現今を研究するに至らざる可らず。近頃世人の社會研究に向つて意を傾くるの兆として、社會の文字を冠せる新著の出づるを見、喜びに堪へたり、諸子と共に余は大に之を歡迎せんことを希ふなり。

一、社會につきて哲學者に望む

世に眞理てふものあり、其何たるを知らず、宇宙皆之に従ひ萬物之に依て存するが如し。人ありて之を知らんと欲すれども天地あつて以來幾千歳之を求めて得ず空しく生て空しく死す。只中に神と稱し聖と稱し佛と稱し賢と稱せらるゝものありて其閃光を認め、眞理と呼び道と呼び教を人に垂れたる。老子曰

有物混成、先天地生、寂兮寥兮、獨立而不改、周行而不殆、可此爲天下母、吾不知其名、字之曰道、と蓋亦是なり。而して其教を立つるや皆人による、即人其人の我(ego)、及人と人、人と社會、人と天地との關係につきて其眞理の一端を示し、愛といひ仁といひ衆生を濟度すといふ、宗教なるものはなり。此宗教あつてより從來混沌たりとせ世は宛も曉鐘に夢覺めたる如く、爾來中日大道を行くに至り

ぬ、然るに月に雲あり花に風あり、人心の道光は尙邪慾の爲に蔽はれ、坦々たる大道を行かず却て暗夜徑を行く底の罪惡をなせ、漸次星移り物變り世は遂に澆季の嘆を發するに至りぬ。

今試みに俗人に問ふに、人とは何ぞやを以てせば、人は人なり豈他あらんやと答へん。是既に人は人なりとして等閑に附し研究せんとはせず。乃ち又重ねて之に説くに、世に眞理てふものありて、人は此眞理を學び人の人たる所以を知り、而して後初めて人の禽獸と異なる所を見ん、人にして人をえらずんば汝何ぞ物あるを知らんや、之を知るは只汝の心に問ひ汝の我を知るにありとこのことを以てせば則ち嘲笑していはん、之を措け又何ぞえかく言ふを以ぬん、人は人なり旨きを食ひ美を着て生を安せば人間の能事終るのみ、汝は實に學者なり須らく飢寒に苦まざらんことを力めよ、我は我生を知れば足れりと、胡んど知らん其の生を知らず其死をえらず徒らに醉生夢死なるを。

If we begin to die when we live, and long life be but a prolongation of death, our life is a sad composition; we live with death and did not in a moment.

是ブローンがいへる所なり、かくの如く吾人の生涯は諸行無常にして朝露の日午を俟たざるものなるに、彼の俗人は平氣に且つ極めて無頓着にして只死の厭ふ可きを知るのみ。彼等は宗教を信するも只其形式に拘泥して其實を知らず、學術を習ふも偏に已れのみにして之を用ひ、遂に人の道を知らざるなり。其行爲を見るに徒らに營々として利に奔り汲々として日も亦足らず、肉体の快樂を以て終生の目的となし金殿玉樓を以て無上の極樂となし、一簞の食一瓢の飲隘巷に在つて樂其中にあるを知らず。其理想を見るに利己主義を以て心となし金、即權を以て眞理と崇拜せり。見よ蟻は小虫なり然も炎熱燬くが如きも尙孜孜として倦まず、食あれば群をなえて之に集り毫も力を惜むことなし。

何ぞ夫れ彼俗人と相類似するの甚しき、走屍行肉と罵倒せらるゝも亦何の返す可き語かある。スベ
ンサー曰

O vain worlds glory and unstedfast state of all that lives on face of sinful earth.

と實に此の如き社會の人の有様は空しき浮世の名譽に漂ひ定まらざる人生を送りて、表面的、美裝、裏面的、醜行の有様となり、カアライルをして『赫々たる電光も終に人心の罪惡を照すに由なき』と叫ばしむるに至りぬ。嗚呼夜をして晝を欺かえむる電光はよく紳士貴女の盛裝を飾るも心中の襤褸は遂に之を照す能はざるなり。然らば此の如き世を挽回するは果えて能はざるか、世に哲學者てふものありて社會の研究に任するなり、然れども今の哲學者はかくの如き社會の狀態を知らざるか將た省みざるか、寂として哲學者の之に向て動くものあるを聞かず誠に怪む可きなり、是果して何の故ぞや請ふ少々之を述べん。

夫れ哲學者は宇宙の萬象理法を網羅して知らんとするものに於て、人を研究し社會を研究するは其一大目的なり、故に前述の如き亂れたる社會人間の研究をなし、其改善進歩の道を講じて之を教ふ可きは素より其分なるも、當今の哲學者は古今幾千歳の間にわたる大人の教を學び之を教へ之を祖述する必要あるよりして、所謂御學者様てふものと化したり、古人が其生を盡して悟り得たる眞理の糟粕を嘗め、自分料理の旨味を人に與ふる能はず、空しく書籍の中に埋もりて其生を終へ徒らに古人の教を今人に傳ふる導管に過ぎざるものとなれり。故に其爲す所行ふ所偏に世と遠かり俗界の塵に染むとを潔とせず、世間に超然たらんの志を以て只管に書籍と首引をなし仙人を氣取り、或は耶蘇或は釋伽或はカント或はヘーゲル或はシヨッペンハウエルなどゝ、心のみ高ぶりて實際に疎く、平生立脚

地云々と稱し乍ら宛も足なき幽靈の如く、又は繋る糸なき風船の如く高く〜と登りて、遂に何の爲に學問をなすやの、脚下に御氣のつかれざるに至れり。此の如くなれば世人は愈哲學者を敬して遠ざけ、先生亦俗人を省みずして實際世界を雲烟過眼視して全く厚生利用の道を講せざるに至れり。然るに物には必ず目的あるものなり、故に科學は宇宙の理法を研究し人をして天地間の物事の知識をつくり物に迷ざらしめ、宗教は人の心をして天に合せえめ安心立命の地をつくり極樂に入らしめんと欲す。而して此兩者を深く研究す可き哲學者に於て實際の人に遠かりて用ひざらんとすれば目的を失して横徑に入るものにして、佛造つて魂入れざると一般、只に木偶に過ぎらんのみ。

是當今哲學者の通弊なり、之にして改革せざらんか、社會實際の研究は遂に歸する所なきに至らん。既に哲學者として天職を有するものは必ず實際に立入りて研究の効果を世に致さる可らざれば既往は咎めず、後來の哲學者に向つて望む所をいはんのみ。

人各職分あり、政治家たるを妨げず商業家たるを妨げず、又工業家たり法律家たり農業者たり教員たり僧侶たり何々たるを妨げず、各其職に従て其事に力む可きなり。然れども人間社會に於て人の最高き天職を有し又最重要き事業をなす可きものは哲學者なり。故に人壯にして志を立て身を哲學に投ずるものは、最大なる勇を以て之に當り、又最博き仁を以て最深き知と共に世を救ふの大覺悟なかる可からず、必ず其學の高尙なる喜びを樂みに研究するなほのことある可らず。然るに年壯にして心定まらざるに當り、哲學の高尙を好み之に浮と研究しかゝるもの、多くは學の廣大無邊にして力足らざるに頓挫し、博學深識を衒ひベダントリとなり、窮まる所論理心理などの支派の學を教授するに至る。是亦教育者として敢て咎む可きにあらねど、折角に哲學を研究したる甲斐に、本体を忘れて支派の學

を職とするは少く遺憾なしとせず。

かるが故に哲學の門外漢たる余は、憚なく哲學を研究せんとする吾壯年者に呈す、諸子は必ず上述の知仁勇の大覺悟を以て學の本末を忘れず、深く社會人心の奥に入りて之を研究し、其救濟の道を講じ、世間實際に行はる可き様社會に教へんことを國家の爲に切望す。

蛇足ながら之に加へていはんに、其大目的に進むには先づ禪の所謂自力の悟徹の道を取り、英雄崇拜論のマホメットの中心にある

what am I (Ego) ? what is this unfathomable thing I live in, which we name Universe ?

what is life; what is Death ? what am I to believe ?

what am I to do ?

の疑問を解き Here am I ? の域に達する順序を以てせんことを願ふ。果して此の如くにして此道に向は、世を益すること幾干ならんか、其生涯には効果を納む可らざるやを知らざるも、百年の後社會の救濟主として右の聖佛を凌駕せんも只其力にあり、古言に五百年にして必ず聖者興るありと、今や聖の出さること千年を超へ、聖に餽する事業已に久し、男子之に當らんとする豈天下の快事にあらずや、余は切に大勇を奮つて立つ人を俟つものなり。

(未完)

大村産眞珠貝

Avicula margaritfera (Omranae) に就て (承前)

澁江富貴三